

らしい祭りになり、参加する人にとつても、見物する人にとつても、伝統を知り、体験し、誇りにつなげる機会になっているのかもしれない。

子どもたちの熱意が 大人を動かした

「実は……」。フェスタの存続が危ぶまれる時があった、と平野さんは言います。「運営が、行政主体からまち単体に移ったときです。自分たちがやる気にならないと続かないと思い、みんなで祭りの意義を問いました。その時です。バザーの収益を持った五福小学校の児童が訪れたのは。「続けたいからこのお金を使ってください、と言ってきたんです。そこで、五福校区内の商店主が『五福風流街商栄会』を発足し、運営を続けることに



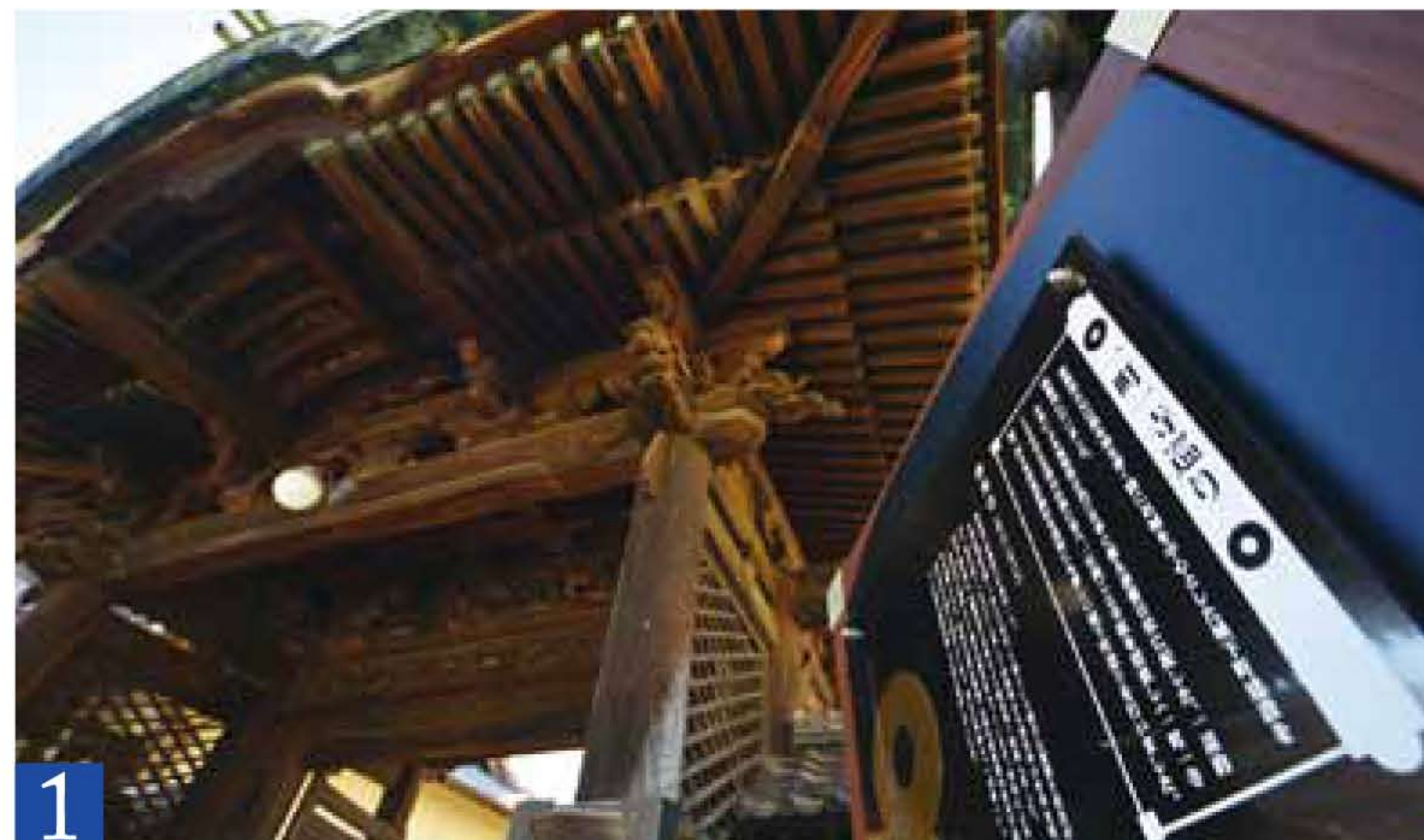
五福校区自治協議会の松田清見会長(左)と、五福ふれあいまちづくりの会の平野俊晴さん(右)。「まちづくりの会では、リーダーシップトレーニングもやっていて、組織が長く続くよう人材育成もしている」とか

しました」。フェスタをみんなを巻き込んで行う、地域活性の行事に……。その願いが形になり、今では、商栄会、校区内の町内会、まちづくりの会、五福小、五福まちづくり交流センターなどで実行委員会を組織。まさに、校区が一体となつて行う「行事」になっています。

歴史と伝統を受け継ぎ、生かす活動に、多くの人が携わる五福校区のまちづくり。一人ひとりがまちを誇りに思い、動く姿に元気の源を感じました。



3



1



2

1 五福校区の町割りは、一辺約120mの正方形の区画が並んだもの。その正方形の1区画ごとにお寺が1つ置かれ（一町一寺制）、周りを町屋が囲んでいる

2 3 閻魔大王像をまつる宗禅寺で、毎年8月16日に開催される「糸んま祭り」。「五福ふれあいまちづくりの会」が主催する。実は、平成3年に復活されたもので、この祭りの成功が「風流街浪漫フェスタ」につながった。参道には五福小学校児童が作った灯籠が並び、幻想的な雰囲気



3



1



2

1 2 3 校区住民が一体となつてつくり上げる祭り「風流街浪漫フェスタ」。平成25年で22回を数える。開催を楽しみにしているリピーターも増えた。「ここだけでしか楽しめない『何か』にこだわり続けた結果です」と平野さん

「五福でないといけない」 奇習復活

校区のまちづくりを語る上で欠かせないのが、毎年11月に開催される「風流街浪漫フェスタ」。商店主やまちづくりの会、五福小児童など、多くの住民が参加して運営するお祭りです。

「フェスタの目的は地域活性。そのため、地域住民が実行委員会を作り、住民一体となつて進めてきました」と語るのは、フェスタの立ち上げから関わる、「五福ふれあいまちづくりの会」の平野俊晴さんです。

企画が始まったのは、バブル最盛期。あちこちにマンションが建設され、まちの姿は変わっていきました。多くの住民が転出し、新しい住民が入り、まちのつながりは希薄になりそうでした。「出て行った人に気軽に

遊びにきてもらったり、新しい方たちが地域に入ったりするきっかけにしようと思いましたが。」と当時を振り返ります。

平野さんたちがこだわったのは「五福でないといけないこと」。その一つが、奇習「すり鉢舞い」の復活です。これは、万町の総社神社に伝わる神事で、すり鉢をかぶった雇われ神主が商売繁盛・家内安全を祈願しながら、町内の店舗をめぐるもの。明治30年頃に廃止したものを復活しました。白塗りの顔に赤い口と頬、頭に大きなすり鉢という見た目も話題を呼び、祭りの名物になりました。また、多くの人が参加できるようにと総踊りバージョンも作成。五福小児童が踊りながらまちを練り歩き、伝統に触れる機会になっています。絶えていた行事を復活することで、フェスタは五福